

真生

第六卷 拾壹月號

□或る青年の親が其の子に向つて「自分の家は代々〇宗だから、他の宗旨になつてはいけない」と云つた。其の時、其の青年が「でも佛教の傳はらぬ以前もです」か」と諍れたら、其の親も返答に困つたといふことである。

□祖先の教へを尊ぶといふことは必ずしも悪いことではないが、宗教までも單なる世襲にすることは全く時代を知らぬ云ひ方である。今頃祖先が武士だつたから、おまへも武士でなくてはならぬといふてを軍人にすべきであらうか。

□祖先が農家だから子孫も農家、祖先が商家だから子孫も商家でなくてはならぬ
 といふことは今時はない。それに祖先の宗教が何宗だからして之を其の子に強い
 るといふことは、決して正當なことではない。それでは頭のチョンマゲもとつて
 はいかぬではないか。

□夫に祖先がさいふかどて祖先の宗教を強ゆるなら凡ての日本人は皆神道にまで歸らねばならぬ。何となれば佛教輸入以前の祖先は全部神道であつたからである□だから、たゞ單に自らの信仰もなく、先祖の宗旨をかつぐなら、世は悉く世襲となる。從つて祖先の宗派を其の子に強ゆるさいふことは全く頑迷の至りである。

又宗教の何たるかを知らぬ人さいふべきである。

又宗教の何たるかを知らぬ人といふべきである。

□嚴密にいふならば昔佛教徒となつた祖先こそ、神道を捨て、來た人である。その中には自ら深く其の宗の信仰に歸依へして、其の宗の信者となつた人もあらうし、又時には何等の歸依もないが、親でも死なし葬式でも頼んで、それが縁となつた信徒もあらう。

□乍然、今日の宗教はそんな世襲の宗教ではない。各人各其の信すべき自らの宗教に生くべきの時である。宗教は人の宗教や祖先の宗教ではなくして、自分の信することのできる自分の宗教でなくてはならぬ。(念)

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

大一生の自覺

目次

大一生への自覺	尅子
茶毘の釋迦	土屋觀道
法然上人日頃の御詞	土屋觀道
私の懷疑(三)	山口常照
懷疑に答ふ(三)	土屋觀道
吾朋便り	
富士別時念佛三昧會	
結衆芳名	

▽あの人は「腹の黒い人だ」といふことをよく聞きますが、自分で自分を見ると矢張り腹の黒いことを必々と感じます、何だか腹の中に塊りがあり、腹の中に曇りがあり、腹の中に煙りがあります。

▽この腹の中の黒い煙が上へ上がつて来て怒りとなり、慾張りとなつて人を痛め、愚痴となつて自分を縛ります。

▽どうかして此の「くせ者」を追ひ出さねばなりません、そして腹の中が日本晴のやうにスツキリ、カラリと晴れ渡り、人にも我にも如來さまにも恥かしくない、美しさにならねばなりません。

▽信仰といふことはどういふ風になることか知らぬが、先づ自己が腹の中から清浄にならして戴くことだと思ひます。自淨其意にならしていたゞくところに、自然に善もさしていたゞき、悪もしにくくなります。

▽如來さまの光に遇ふ者は三苦消滅し、心意柔順に、歡喜湧躍して善心生せんと經に曰はれて居りますが、善の如何なるものかわかりませんが、この曇りのない「麗しさ」の奥から出て來るものが、自然に善と云はれるものであり、正義、安忍、剛毅、貞操であるでせう。

▽信仰はこの麗はしさにならして戴くことであり、お念佛はこの清浄人にならして戴くことだと信じます。皆は憑き者のついたやうに狂てゐます、金に狂つたり、女に狂つたり、學位に狂つたり、この狂ひから醒め、その憑きものが落ちて眞正の人、覺醒の人になることが信仰でせう。(尅)

□我々の一生も、もう今に終ります、その境界線がホン目の前に見えてゐます。

□それに何をウロ／＼してつまらぬ事に惱んでゐるのでせう。イエスも「何を喰ひ、何を着んとて思ひ煩らうこと勿れ、野の百合の花を見よ、如何にして育つかを」と云て居られます。生活して行く位は何としてでも行きます、さもないければ死なんならぬから、乞食になつてでも生きてゆくでせう。而し「本當に生きてゆく」ことは難しいものです。

□按摩になつてもいい、踏切番になつてもいい、その道で以て眞に自分の全力を盡してゆけるなら、價値の生活です、それこそ天上天下唯我獨尊の大菩薩行です。人からあがめられる仕事ばかりが尊いのではない、人の靴磨きをしてゐても、本當に自分を生かし、人を生かしてゐる人こそ、眞に如來さまを生かしてゐる人です。假令醫學博士にならうと、大臣にならうと、金儲けの爲めの利權屋なら、それは大した事ではありません。

□こんな事はわかり切てゐるが、果して自分の仕事、自分の生活の上に十分の自覺と生氣とを感じてゐるでせうか、我々の一生は一生の一生でなく、永遠を貫いての「大一生」です。こんな五十年を胡魔化してゆく丈けなら何とでもして行くが、そんな一時凌ぎの「どうでもよい」式の人生でなく、全生活をして價値あらしめねばならぬ大切な寸時寸刻です。

□だから此の一事の上に自己が生きて、この一作一業をして眞に一切世間情非情をして得脱せしむる大菩薩行とせなくては、自分のため、他のためにも申譯ない次第です。

□我々は生活の上に死ぬか、生きるか、其岐路に立て、いつも生きてゆく努力こそ信仰だと思ひます。(尅子)

茶 毘 の 釋 迦

(佛を見る者 五)

土 屋 觀 道

一、
ついでだから今一つ茶毘の釋尊について語らせていただきます。それは釋尊が死なれたので、二人の佛弟子が釋尊を茶毘に附してゐる所であります。いとも静な入り日の夕ぐれ、河のほとりの小高い岡に野天で釋尊の御体を焼いてゐるダビの光景であります。釋尊を中にして、上と下に、まきをつみかさね今しもそれに火がついて、世尊の御體が二三部通りも燃かけたかと思はれるところ、そこに二人の佛弟子が、いとも哀愁の念にたえざるもの、如く、肖然として立つて居るのであります。而も其の燃わがつて行くほのうの穂先きが、まきの燃ゆる火と世尊の燃える火と一緒になつて、燃わかけてゐるのを思はせるものであります。あの釋尊の尊さを知るもの、あの釋尊の偉大を知るもの、誰か此の茶毘を見て謂知れぬ感に打たれぬものがあります。

二、
私は靜に此の畫に見入り乍ら、かつて拜讀した釋尊の御傳を想ひ、前に申したラゴラの出家や、説法の釋尊、行乞の釋迦尊に就て想ひ偲ばれ、今こゝに世尊の茶毘に接し、今更のやうに謂知れぬ感に打たのであります。

「諸行無常！此のことを今釋尊は我が身を以て示されてゐる。何といふ莊嚴の説法であることよ。いつも釋尊の説法には此の事實を説かれてはゐるが、今此の自らの身を以て遂に無常の事實を示されると云ふことは何と云ふ尊い示教であらう。そしてまた、誰かこの無常の事實を逸かれ、又此の事實を否定し得るものがあるであらうぞ。」

「無言の説法！そこに身を以て之を示し給ふところ、そこに諸行無常と云ふことが現前として現はれて来る。そしてまた自分もいつかはこのどうりの茶毘の日が来ることを如實に感せずにはゐられない。是生滅法！ほんとうにさうだ、これ正に生滅の法である。一切の現象、何ものか生滅なきものがある皆これ悉く生滅の法であり、皆悉くこれ無常の法である。」然に吾人は幸にして己に此の法を聞き、已に此の法を見る。世の多くの人々の未だ此のことを知らずして、徒にこの世に執着して迷ふに比して、今や吾人は此の無常を悟り、無爲泥洹の常樂を見る。「何と云ふ有難いことであらう。私もかつては此の肉体の死を恐れ、此の世の無常を悲んだ昔もあつたが、今はむしろ之を當然として、反てそこに常恒の涅槃を見る。」

三、
「何と云ふ茶毘の火の深刻なることよ、其のほのをの火の色が一々釋尊の肉と油を血の塊りと一つである。そして又それが諸行無常の説法であり、是生滅法の相と共に之に即して涅槃を語る。而て、このことを亦、二人の佛弟子が其の姿の上に之を語っているものであります。二人とも何ともいへない、悲痛の感にあるもの、如くでありました。一人の若い方の佛弟子は色白き見るからにやさしい若い青年の僧でありましたが、いかにもたゞ釋尊の入滅と、その御体の燃えつ、あるのを見るに忍びないやうな風でありました。又いかにも別れを惜んで、見ずにもおれない、いたましい姿でもありました。而て、他の

一人の佛弟子ははう骨も出た色薄黒い壯年を過ぎた、羅漢の一人かとも思へる僧でありました。同じ哀愁の相ではありましたが、それでも已に一分の悟を開いたもの、如く、かつてかう聞かされた釋尊の説法のいかに無常であるかを思ひ當つて、而も其の説法の當体を今までのあたり之を味ひ、更にそれに即して、涅槃の世界を靜に思ふもの、やうでありました。そこに二人の僧の人格を各々表はしてゐるのでありましたが、人としての人間味を充分に語ると共に、又そこに涅槃の大道を其の二人の上に示すものでありました。「二人の佛弟子、そこには何等の矛盾もない」と二人とも其の心情が私にはよく解かるやうな氣がしました。「どちらでも淋しい心だ、然し同じ淋しさでも、一方には悲さが伴い、惱みが伴い、愛別離苦の涙が伴ふてゐる。そして、一方にはそれが無い、淋しさを淋しさとしてそのまゝ、眺め、亦、戀みを悲しみと眺めて、そこに惱みと苦みとが寸毫もない、而もそこにはつゝしまやかな、謹嚴の心はある。」と私には思はれました。

四、

「この二人の僧は阿難と舍利弗との二人ではあるまいか？、若いのが阿難で歳老いたのが舍利弗で若しさうとするならば、いかにも此の畫は更に其の真相をうがつてゐる。何となればか、る光景に於て、かゝる面もちを爲すものは此の二人の外にないからである。そしてまた、よしあるとしても此の二人には勝るまい。而も此の二人が其の凡てを代表せるかたちにも見ゆる。而て此の畫に於て、いかにも阿難は阿難らしく、舍利弗は舍利弗らしくあらはれてゐる。それがまた各々決して無理がない。各々それが各自に於て、それぞれふさわしいあり方である。」

「同じ佛弟子としても、阿難は釋尊に常待して、最も寵愛を受けた一人であり、世尊を何よりのたよりとした阿難であるが、それにもかゝらず彼は未だ眞の悟を開いていなかったと云ふことである。して

見れば今この釋尊の入滅にあつて、親しくいつもの隨待もできず、又いつものやうに之から阿難と云つてしかつて下さる御方もないかと思ふ、阿難の心には到底常人の想像もできない、なつかしさ、淋しさ、悲しさ、つらさなどが此の釋尊の茶毘に接して一層起つて來ることは亦當然のことと云はねばならぬ。之は自分が現に何にも代へ難い、たゞ獨りの老師を亡くしたときだつてさうであつたでないか、阿難がなげくのも亦無理からぬことである。でもかうした悲しみが私が死んだあとにも起るではないか、私の如きものではあるが、私を愛してくれてゐるたゞ獨りの妻、少くとも彼ひとりには私の死に對して、釋尊に對する阿難の如き淋しさと悲さとなつかしさをつらさがあるのであるが、私から云へばどうかして、阿難のやうなかうした悲しみは自分の妻にだけは、もたせたくないものである。乍然彼は果してそれに堪えうるであらうか、それにしても、さうした悲しみは見せたくない。けれどもそれも或かりでない、今現に、もの心つくわが子の上にも、さうした悲しみは見せたくない。けれどもそれはできないものかも知れぬ。阿難は已にそれを示してゐるではないか。そしてまた、如來は此の阿難を通じて其のかなしみの事實を私共に示されてゐる。さうなると、自分の方が彼等よりも寧ろ遅れて死んだ方がましかも知れぬ。さすればかゝる徒なる悲しみや、淋しみや、惱みを彼等に與へずしてすむことにもなる。又さうなれば自分が彼等の爲めにも思ふ存分の世話もできると云ふもの、さうなるとせめて

自分の妻子も亦、彼の舍利弗位にはなつていて貰いたいものだ！」
かうした考へが私の心に、それからそれへと起つて來て、それがまた、單なる妻子もつ私のことばかりでなく、同時に一切の妻子をもてる人々の心ともなり、また夫を亡くした妻子の上にもなつて、私の心は限りなき同情と寂滅の悲哀とを感せずにはゐられないものがありました。乍然かくの如きの淋しさは多くの釋迦教を信するもの、等しく味ふところの淋しさであり、又自らなる事實ではないか。

「然に今私達は幸いにも此の淋しき人生の事實にあい乍らも、彌陀の淨土を信じてゐる。さうして、此の淋しさを越えて、如來の淨土は大悲の中に輝いてゐる。如何なる罪深い人々も、いかなる愚かなる人々も、皆悉く救はるゝの世界に居る。そこは單なる靜寂の世界でなく、全く生ける如來の大悲界である。大無量經を通じて現はれ給へる如來本願の大悲界こそは目にこそ見えないけれども、目に見えるそれよりも事實として、今現に私共の心の中に輝いてゐる。父の姿、母の姿、己に私には肉の眼としては之を見る事ができないけれど、肉の姿を通じて此の世に現はれていた、いた私の父母の姿と其の限りなき慈愛の心とは現に之を體驗し、其の體驗の事實は今も尙私の心の奥底に昔にもまして、常恒に働いてゐるのであるが、此の心的の事實のそのまゝを、宇宙のミオヤとして、如來の大悲が私の心の上に本願の大悲として、救いの御光を放つてゐる。而てまた此の釋尊の茶毘の事實であるやうに、釋尊のこの世の出現も事實である。而て等しくこの事實が宇宙の本源から私共を眞に其の本源に歸らしめんが爲めの如來大悲の出現である。否、現に此の諸行無常の現實を通じて、涅槃常恒の彌陀の世界が一層晃々として光り輝いて來るのを感じる。」

「靜に考ふれば之は亦何と云ふ尊い有難いことではないか。己に此の一茶毘の上に、即ち釋尊の入滅を境として、私共の肉身もいつしか燃つくすことのあるべきを示すとともに、それにもまして亦永劫に生ける如來の活動を示し玉ふを見るのである。乍然この茶毘に於て、阿難はもとより此の舍利弗と雖も果してか、る如來の生ける御姿を發見し得たであらうか、否、恐くは彼等の心には未だ此の永劫限りなき如來の御姿を見ることができなかったではないか。恐くは彼等は諸行無常の世界のみをみて、寂靜涅槃のほかに限りなき如來の大悲の更に輝くのを知らなかつたではないか。」

「して見れば私達は之に比べて何と云ふ有難い人生であらう。一方には諸行無常の現實を見つめ、其の中に寂靜涅槃の世界を知ると共に、更に又永劫滅せざる佛國淨土の大悲莊嚴の世界を拜して、親く此の世から念佛の衆生でありうると云ふことは、彼等二僧に比べて限りなき喜である。肉体を以て此の土に現はれ玉ふた釋尊に直接御目にかゝることのできなかつたのはまことに殘念なことである。けれども、乍然それにもまして、此の無常を超えたる常樂無爲の大涅槃として、永劫に輝き給ふ如來の大悲に接することができたのは此上もない喜びである。そして又、之こそは彼等に比して更に大なる眞人の喜びだと云はねばならぬ。そして私はまたこの喜びを私の妻子に傳へ、それと同時に之を一切の人々に傳へることのできると云ふことは何と云ふ仕合せなことであらう」と、寧ろ此の喜びに感激するを覺ゆるのでありました。

夜も已に一時を過ぎて二時近くにもなりまして、外は雨風で可なりに激しい嵐でありました。それから床につくことになりましたが、翌日は亦午后から名古屋の集りに行かねばならぬので、丁度五時頃に床を起きました。幸にも神戸の鶴田氏が一緒に起きて、雨風の中を勿体なくも御送り下さいましたことは涙ぐましくまで有難くありました。道友の暖き心よ！ 永久に忘るることができません。

「それにしてもあゝなつかしき印度の地よ、御身は幸多き國なる哉、いとも尊きあの偉大なる世尊を産み、そして幾多の衆生を救ふ此の大道を此の土に降す靈地となつた。自分も御前の國を訪ね世尊の聖蹟を順拜すべく、戀いあこがる、こと幾とせう！ 己に心から御身を戀し、親しく、訪ねたいと志してか、己に二十有一年を過ぎた。そして未だ不幸にして私には其の期會をさへ得ないのだが、それでもいつかは御身の國に我足蹟の印せらるの時があることであらう。幸多き印度よ私はお前を心からあこがれて

ある。そして汝の地、聖者佛陀の靈蹟を拜むとき、私の心はいかばかり喜びに躍ることであらうが。さうして私が汝の國を訪ねるのは、單なる私の遊びではない、汝の地、聖者の佛蹟を參拜することによつて、私の心が如何ばかり清められ、私の心がいかに靈化せらる、であらうかを自らにაცოგარ、が爲めである。さうしてまた、それが爲めに、多くの我が同朋に對する間接の結縁ともなるであらうことを私は心から希念して止まないものがある。なつかしき印度よ私はいつまでも汝を思ふ。」と。

かくて車中も頻に彼地のことに思ひこがれて居りました、そしてまた小林上人のなつかしき風貌を心からしたつたことでありました。(一一〇、二六、三河城寶寺にて)

以上號を追て私の掲げた三四の題號は主として、釋尊の行跡について二三の感想を述べたものに過ぎぬものでありますが、私は今更のやうに此の中に眞の佛を見ることのできるのを喜ばずには居れません。そして、それは結局佛を見る者とは法を見るもの、謂であり、法を見るものとは結局佛を見る者であること云ふことです。而て、こゝでは釋尊を通じて、眞の佛を見、其の法を見るところに、永劫不滅の眞佛を拜することを私は感じました。從て佛を見る者とは即ち法を見るもの、否、少くとも釋尊を通じて釋尊の上に、眞の佛の現はれてましますことを語つたものが以上の題目でありました。いはゞ眞に佛を見る者とは眞に釋尊を見るもの、謂に他ならぬのであります。然に世には佛を見ると云ふことを以て釋尊の單なる肉身に捕はれて、肉眼の上の釋尊の姿を見るのを以つて見佛であるかに考へるものがあります。乍然若し其の姿の上に如來の眞法を見るのでないならばそれは決して眞に佛を見る者ではないのであります。從て若し佛の形相に捕はれて、色相の佛にのみ心を奪はれるものがあるとすれば、それは決して眞に佛を見る者とは云へぬのでありまして、それはたゞ一の幼稚な幻影を見たに過ぎぬのであります。だから佛を見る者は必ず併せて法を見る者であります。(一一、一日東京にて補)

法然上人日頃の御詞

(三)

(勅修御傳第二十一現代譯)

土 屋 觀 道

又いはく。本願の念佛には、ひとりだちをさせてすけさ、ぬのである。すけと云ふのは、智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすのである。善人は

善人ながら念佛し、惡人は惡人ながら念佛し、たゞ生れつきのまゝで念佛する人を念佛にすけさ、ぬとは云ふのである。然し乍ら、惡を改め、善人となつて念佛する人は、佛の御心に叶ふことであらう、かなはぬからとて、あゝあらうかうあらうと思つて、決定心のおこらない人は往生のきまらぬ人である。

一云ふ意は。本願の念佛にはひとりだちをさせてすけをせぬことだ、智慧がなくてはならぬ、戒を守ればならぬの、道心がなくてはならぬ、慈悲心がなくてはならぬのと、念佛以外に色々の必要はないと云ふことを示されたものである。從て、善人も惡人もそのまゝ直に念佛することによつて、助かることを示され

たものである。然し若しできることならば惡を改めて善人となつて念佛することは細佛の心にも叶ふものであるが、だからさうして、それができぬからとて、どうしやうかうしやうとてなやむ必要はない、反てなやむところに、本願にたのむ心が決定せぬので往生を仕損ずることの歎である。

又いはく。佛阿難に告げて、汝好く是語を持もて、是語を持てとは、即ちこれ無量壽佛の御名を持てとなりと云はれてある。名號(のいはれ)を聞いても信せないならば聞かないやうなものだ、(また)たどひ(それを)信じて、之を唱へないならば信せないやうなものだ。たゞ常に念佛は申すべきである。

一云意は。念佛はたゞいはれを聞いただけではいかぬ、常に念佛は申すべきだと云ふことを示されたもので、念佛の行なはげむべきことを示されたものである。

又いはく。近頃の念佛者觀法をすること勿れ。

佛像を観じても運慶康慶が造つた佛はどにさへも佛を観じ現はすことはできない。又極樂の莊嚴を観じても櫻梅桃李の花や果はとも観じ現はすことはできないことであらう。たゞ彼の佛今現に世に在つて成佛したまへり、當に知るべし、本誓の重願虚からざることを、衆生稱念すれば必ず往生を得との善導の釋を信じて、深く本願を信賴して、一向に名號を唱ふべきである。名號を唱ふると三心も自ら具足するのである。

一云意は、こゝに云ふ觀とは佛像を觀したり、極樂の莊嚴を觀じ出さうとすることを戒められたもので、そんなことは今時の人々にはさてもできることだから、たゞ彌陀の本願を信じて、稱名すべきことを示されたものである。一心に念佛さへすれば三心なども自らこもること併せて説かれてある。これは觀佛三昧を否定して、念佛三昧をおす、めになつてあるところと見ればよい。

○ 又いはく。往生の業成就は、臨終平生にわたるのである。本願の御文にはつきりと別けてないから。惠心の御心も平生にわたると見てゐる。

一往生の業が定まるのに、必ずしも臨終ばかりでないといふ云ふことを示したので、必ずしも臨終業成でなく、平生業もあり得ることを示したのである。

云ふことをいつたものである。

○ 又いはく。他力本願に乗するに二ある。乗せないのに二ある。乗せぬ。其の故はこのやうに罪をつくるに乘せぬ。其の故は二に道心の起るとき乗せぬ。二には道心の起るとき乗せぬ。其の故はおなじく念佛申すとも、このやうに道心あつて申すところの念佛でこそ往生はするのである。無道心では念佛してもできるものでない。道心を先きとして本願を次におもふ時に乗じないのである。

次に本願に乗するの二つの様と云ふのは、一には罪つくる時乗するのである、其の故はこのやうに罪を造ればきまつて地獄におつるであらう。然に本願の名號を唱ふれば決定往生することの嬉しさよと、喜ぶときに乗するのである。二には道心の起るとき乗するのである。其の故はこの道心で往生はできない、これ位の道心は昔から起つたのだけれども、いまだ生死を離れない、故に道心

の有無を論せず、罪を造つたことの重い軽いをいはず、たゞ本願の稱名を念々に相續する力によつてこそ、往生はどぐるのであると思ふとき、他力本願に乗するのである。

一云意は。偏へに他力本願をたのみて稱名念佛すべきことを明すのであつて、自分の道心や、造罪の輕重を以て往生を定むべきでないことを示したものである。此の點偏へに信機信法の極妙を語るもの私共のよく心して味ふべき點である。

私の懷疑

(三)

山口常照

一前承一辨榮上人作光明禮拜儀十二光禮讚の中「攝化せられし人は皆」を「攝化せられし終局には」と變更せられしについての懷疑 (記者)

それは仄聞する所によると、故上人在世に某氏が故上人に向つて「攝化せられし人は皆」とある所を訂正して貰はんと、故上人の感化を受けた信者(特に土屋氏を指す)の中に、茲を誤つて覺佛体現など、豪語して、悟つた顔して、得々として居るものがある、故にかゝる誤りに陥りて居る者の爲にあの所は何とか訂正して貰ひ度いと申込んだといふ事である。(三)又これは直接に私の聞いた所であるが、たま／＼土屋氏の話が出たとき、故上人が「土屋氏の信仰と一ヶ所だけ合しない所がある、それは土屋氏のいふ覺佛体現といふ一事である」と。然しこれなんかも、あの故上人

山口氏の懷疑に答ふ

(三) 土屋觀道

(一) 三)私は確にさう聞きました。そして始めて私も其の改訂の理由が其の人によつて明となつたのです。そしてまた、それだから此の本文が台なしになつたのだと知りました「では誤り易い人だけでそれやれ、自分たちは從前の慣れた方である」と思つたのもその時でした。

(二) 三) (四) 虛大安想と云ふことは當時貴師から私が傳へ聞いたところですが、まさかと思つたが、其後上人が九州の善導寺歡喜院に居られたとき、丁度私も折合つたので、右のことを尋ねたことがありますが「成佛の理想は正に覺佛体現にある。体現なくして何の佛教ぞ」と云はれたことを覚えておます。之は當時上人門下に私を排斥しやうとした人々の

離間策にすぎません。

(二五)「攝取同化の終局にはの讀は只今私の手も上に上人の道詠集がありませんから確さはいへませんが、多分古き昔の御詠かと思ひます。

(二六)この十二光佛の圖及其の讀は大正九年上人が十月唐澤の三昧會を終つて、越後に行かれ、新潟で書いて新發田の或る信者に贈られたものでありますから、多分の訂正本の直後でないかと思ふのです。

(二七)だから若し上人最後の訂正ものと云ふなら、寧ろ此の十二光讀こそ、最後のものと云ふのであります。

(二八)何れにするも、上人が信者に頼まれて訂正をよぎなくせられたことだけは確であります。

(二九)上人が他人の掣肘を受けられるはずがないこの點に就ては、掣肘の字がおだやかでないが、嘗て禮拜儀の一部改正を私に御相談になつたこともある位だから、必ずしも人の願ひを入れ得ない上人でないことは明かです。

(三〇)此の點貴師と全く同感です。月を見るにもおぼろげに月を見るのと、はつきりさ

が果して言はれたか、若しも言はれたとすれば、私は故上人の人格を疑ひ度くなる。然し私は此の一事は事實として信じ度くないなせならば、故上人は覺佛體現とこそ言はれないが、禮拜儀の「常恒不斷の光明に、我等が意志も靈化せば、作佛度生の願ひもて、聖旨現はす身とはなる」と、或は「智慧の日月の照らすもど、光の中に生活す身は、聖意を己が心とし、三業四威儀に行爲なり」と言はれてある点は、正しく覺佛體現を表現して居られると拜察す。然る上は故上人が土屋氏の覺佛體現を理解し切れない御方では勿論ないし、どうしても、そんな事言はれたとは信じられない此の事なども余程疑はしい点がある。(三)尙ほ甚しきは現にそれは私がまだ在京中の事であるが、故上人が、土屋氏は虚大妄想狂であると言はれた等と言ひふらして、故上人と土屋氏との離間策を構じ、土屋氏を排斥せんと隱謀をたくらんだ人さへあつた位で、かれやこれやを思ふ時、既に述べた訂正問題にもそこに何か不純な分子が混入しては居ないだらうか、然もその訂正が故上人在世に發表せられずに、滅後發表せられ、殊に土屋氏へは、特使が立つてその領解を求められたとかどうとかといふ事ではないか。斯くの如き事を聞くに就て、彼の訂正問題が益々懷疑の色を深めるのである。(三)

然し茲に私が更に奇怪に思ふのは、道詠集の如來光明讚の頌(四

二三頁)にも「攝取同化の終局には、彼此を絶して無對とす」(五)とあり、更に同集の十二光佛の圖解の讀を見れば、無對光佛は「攝化せられし終には」(三)となつて居て、其の他は訂正前の通りになつて居る、例へば「佛知見を開きては、聖なる眞理示さる、」ととも思ふが、若しもこれが古いものとすれば、最初「終り」であつたものを、「人は皆」に訂正し、更に他の方から例の問題でやかましく言ふので、もとの終局に復讐せられたものか、(三)

かく推察して來ると、他の人の掣肘によりて訂正されたを見る私の邪推は、影薄くなつて來る。殊に、故上人を掣肘して訂正せしめたのではないかと、めぼしをつけた人々は、偏依辨榮式で、故上人は三昧發得の人なるが故に如何なる事にも間違なしとし故上人の遺稿なども一字一句不可加減を嚴守して居られる人々であるから、上人滅後、勝手に訂正されたと解するのも間違つて居る様であるし、(三)又故上人が他から掣肘されて、訂正される様な人格の御方であつたとも思へない。自らされたとすればなんでまづい訂正をされたのであるか。(元)

それとも成佛を今の一念一念に見る私の考が抑々間違つて居るのか？ 然し一念一念の往生、一念一念の人格完成を信じない事には現在生活は満されないし阿彌陀如來の本願成就も信じられない。十劫の昔正覺成就しましてあるさいふ阿彌陀如來の本願成就を以前私は疑つた。何となれば、法藏比丘が本願成就して正覺をとつたとする

月を見るそばそこに幾分の相違もありませんが攝化の當體に之を見るのと、攝化の終局に之を見るとはそこには可なりの優劣がありませう。

(三一)私も之については承らくの問いやな氣もちで居りましたが、右の訂正の次第が判明してから、すっかり昔の氣分になりました。今でも昔のまゝに上人と共に同じ調子で讀歌をしてゐることが度々です。

(三二)今の光明會を認むるか否かこの質問は私も一寸困るところであります。何となれば已に上人當時の信仰の人々からなつた光明會でないものもあるからであります。否、今日のところ、多くは變質のものが甚だ多い、とでありませう。名ばかり光明會でありまして、其の實に於て上人の心と相反しては仕やうがないではありませんか。だから、今や私は其の實を明にする爲めに、其の名を棄て、光明眞生會としたのであります。上人の光明主義は如來の光明の中に遊ぶのではなくして、其の中に眞に生るにあるのですから、眞生の二字を加へて是等の人々との區別したのです。

かく言へばさて、私は今日の光明會と名の

ならば、現在の我々も遠の昔に救はれて居なければならぬ。然るに今現に我々は迷ふて居る、此の現に迷ふて居るさいふ事は本願成就されてない証據ではないか。考へて本願成就を疑つたのであるが、本願成就さいふ事は法藏比丘の生活に就て言ふべき事であつて我々の生活に就て言ふのではない。

私の今日の考では法藏比丘が本願を建てられたその一念に既に本願成就がある。四十八願の一願一願に成就があり、無量の願が永遠に成就せられて行く譯である。本願成就は佛道修行の卒業ではない、佛道修行が無限ならば、本願成就も無限であらねばならぬ。私は本願成就をかく心得て居る。此の如き見地から考へる時終局の成佛でなくして、刹那の成佛でなければならん様に思へる。即ち天香さんのいふ「一步一步を味はふてこそ、そこに淨土はあらはるれ、父母所生身即証大覺位とまで行かすとも一足一足に解脱の光はまして来る、急がなくともよい踵を返す處に究竟はある。」

確にさうだ、一足一足に解脱の光は増す、一念一念の念佛に覺位は増す。踵を返す處に究竟はある。攝化せられし自覺の一念、その一念より正しく究竟はある、成就はある。然して訂正された終局の意味を此の究竟の意味に取れば私の疑問はなくなる。然しそれであつたらば何で訂正するの要があるか、終局といふ事を特別らしく訂正せずとも、もとのまゝで十分であつた筈であるのに！。(三)

つくものがすべて間違つたものばかりだ云ふのではありません。今も尙昔のまゝの名によつて、眞に上人の御心に叶つてゐる人々も多々あること、信じます。だから、たゞ光明會と云ふのだからと云つて、一概に之を排斥すべきものだとするでもありませんが、乍然之と同時に、光明會と云へば其の惡くが光明主義であるかの如く思ふことも決してないのです。

従て、要はたゞ、如來の慈光の裡に、日夜活動して止まない、眞人の集りをこそさるべきであります。だから若し私共と其の名を同じくしない人々の中にも、或は私共以上に光明主義の心に叶つてゐる人がないとは云へません。そしてまた、私共を以つて其の名の異なる爲めに光明主義でないかの如く誤解してゐた人々も、其の眞生の内實を知るに至つて全く私共と共鳴して、俱に其の手をさる人となる人も亦必ずあること、信じて疑はぬものであります。

以上は禮拜儀の一部改訂に對する私の一考察に過ぎぬものであります。幸に之を期會として、私共の外に光明主義と云ふ人々も多々あるやうですから、其の意味を明にしてい

兎に角、上人！訂正問題に就て私はデレンマに陥つて居ります。禮拜儀を讀んでも攝化せられし終局にはと讀み下せない、無論、光明會といふ會を認めなければ、此の煩悶はありません。(三) たゞ念々成就の念佛を如來光明中に申して光明生活にいそしむ、禮拜儀も自分の思ふ通り、氣に入つた通り讀めばよいのですが、光明會といふ集團を認むる以上禮拜儀の如きは一定したいと思ふが、その協定が出来なければ、當然分離すべきでせうね、どんなものでせうか？(三) 此の問題に就ては、全國光明會員の意見も伺ひたいと存じますが、差し當り上人は此の問題を如何御覽下さいませうか、御批判を乞ふ次第です。(以下畧す)

●吾朋便り

口東京 土屋觀道

皆様には御障りも在りませんか、永らく御目にもかゝらぬ方もあります。思へばそれだけ一層に偲ばれてなりません。願くば時々皆様から御便りがいたゞき度う存じます。

次に今度の御殿場の三昧會は初めての催であり、己に十月の中旬で寒さも可なり強いこととて、各地の集りもいかゞと案じて居りました。其の割りに集りも多く、念佛も殊の外に靜に申されて近頃ない喜びでした。海拔一千八百尺の高地、時々大乘寺の庫裡の二階から西北に高くそびれた富

士の勇姿が眺められたのは此の上もない嬉しさでした。最後の十八日の一日はそれこそ近年にない晴天だとか申しましたが、二十何名の有志が一同自働車で富士の五湖めぐりをやりました。念佛の中とはいへ勿体ない氣もしましたが、殊に精進湖の西山精進バノラマの風光は全く筆絶のきわみでした。

たゞきたいものであります。殊に從來の禮拜儀を捨て、上人滅後の發表による禮拜儀による人々の偽りのない御高見が拜聴したいものであります。但し先聖の言ふところ一字一句不可加減なこと、盲信して、テニラハの誤脱や誤植までも、上人そのまゝとして崇拜するやうな説明だけは聞きあいておますから其の必要はありません。

(二、七、四一全八、二二、再校一九、四、三校一〇、三二、四校終り)

丁度其の南方に當つて富士の全体が大壯觀の雄姿を示し、其の反對の北西にかけては日本アルプスの山脈が天を摩して、そびえ立つて居るのであります。自然も自然全く大自然のそのまゝを私共に提供していたゞいた有様でした。次に焼津と名古屋の例會に列し、二十三日から六日間三河の城寶寺の修養に參りました。晝間は十夜法要としての一般信徒であり、晩の六時から九時まで、朝の四時から八時までを地方青年の修養會と云ふことであります。丁度好期としてあてこんであつた日が、農家の繁忙期によぎなくせられたので、青年諸君の集りの殆どなかつたのは止むないこと、して、其の他一般の道友の熱心なのは全く感じ入りました。殊に其の寺の住職

の御熱心なものと先住の已に八十五才を越えてゐられるのに、其の若さには感服の外ありませんでした。同じ宗門にも近頃かうした熱心の士あるかと思へば心強いことであります。又月江寺の三浦春溪尼、及び善明寺の平野稱眞尼、其の他二三の青年諸君の強い其鳴を得たのは何よりの喜びでした。次に二十八日の三河舉母に於ける光明眞生會の發會式は私の最も忘るることのできない喜びの一であります。それは主として、本田、吉田成田の道友が御盡力の結果、此の地の青年を中心とした眞生同盟が結ばれたことであります。晝夜三回に渡る講演と念佛で寸暇もなかつた私も、其の一同の熱心さで疲れも忘れる有様でした。其の他土橋や竹村などからも走せ參じた道

友の方々もありまして、心からなるこの集りが如何になつかしくも亦にぎやかであつたかは全く想像の外であります。尙それに御多忙の中を洞泉寺住職の詰切りの御盡力と、性源寺様の病院からの御手紙は更に一層の喜びを添へるものであります。此の分で行くならば吾道友の全國的に擴まるのも決して遠くはないこと、信じます。願くば此の際共俱に如來の慈光宣傳に更に一層の御盡力を希念して止まぬ次第であります。

——旅行日程變更——

○十一月五日夜 清水實相寺。
○全六日 大垣市晝圓通寺。○七、八、九日 岐阜市本誓寺。○十、一、二日三日間 桑名町光德寺。○十三、四、五日三日間晝夜 大阪市生玉寺町長圓寺。○十六、七

日夜間 全市南綿屋町六四豊田省三様。○十八日晝 神戸市山本通四ノ八ノ四 藤村様。○十九日晝 焼津町光心寺。○二十日歸京。○二十三日東京發北越地方十二月上旬まで。

▼新潟縣 佐藤益掌様より

秋日和は何ともいひ知れぬ心持が致します。お上人には定めしお元氣にて、お歸りになるゝ事とお察し致して居ります。

この間は態々御便り下さいまして本當に喜びました。殊更御上人に御心配かけまして誠にすみません。さほど御心配して頂くほどの事ではなく唯々私共が精進の足らぬだけの事ですから、どうぞお安堵下さいませやうに御願ひ致します。最早来月下旬には來越下さいませと思へば何となくぞくぞく嬉しくなつて來ます。

いろ／＼な御話聞かして頂えたり又いろ／＼申上げて見たいと思ふ事も御座います。村でも方々木魚の音がいたします。殊に昨日今日に疲れ切つた百姓さん方さへ朝の四時頃から木魚が聞えて來ます事は、誠に尊く思はれま

す、又私の念佛が郡の神職間に多少の問題にされて來てゐるやに思はれます。どうやら先方様でも切り出しかれてゐるらしいと思はるゝ節があります。では取り急ぎ御詫言や近況御知らせまで奥様にもよろしく御傳ひ下さい、うちでも一同よろしく申して居ります。

▼岐阜縣 栗野準一様より

先日大乘寺様では大變御世話になりました。本當に難有く存じました。遠くに暮つて馳つて行つた甲斐を今尚しみ／＼感じ本當に合掌の外はありません。

次に漸く當地名物の柿が充分熟しましたから本日汽車客車便で送荷いたして置きました。か

らお上り下さいませ、とても美味しい柿です。どうぞ充分お上り下さいませ、今箱に詰められつゝある柿の顔を見ると、私自身もかくありたいものだと思ひて止みませぬ。

▼静岡 關秀子様より

私は實に先生によりて眞生に目覺める事が出來ました。先生は私の魂の親です。先生此の世に居まされば我身は今頃どうなつて居つた事でせう。思ひ出すも恐ろしき極で御座います。私は今こそ眞に人間らしい價值ある生活に追求的努力して居るのです。今こそ日々新たな歡喜と法悦みに満ち／＼と働かせて戴いて居る事は皆御佛の大慈悲に依るものと涙なくして合掌せずには居られません。

富士山麓 別時念佛三昧會結衆芳名

秋期特別

- | | | | |
|----------------------|--------------|--------|-------|
| 東京芝公園地十四號ノ九 | 土屋 觀道 同 | 神田區江川町 | 神谷善之進 |
| 同 芝園寮 | 樹下 信雄 同 | | 神谷 たれ |
| 同 中目黒一四八五 | 谷口春沙觀 同 | | 齋藤 義雄 |
| 同 本郷區彌生町三番地二ノ三三佐藤正男方 | 市外瀧の川 | | 友田 善雄 |
| 五井 修 同 | 瀧の川西ヶ原四八八小林方 | | 五井 孝夫 |

新瀉縣柏崎町本町四丁目	岩下 祥兒 同	室町	淺野 覺衛 同	北長狹通二丁目鶴田昌造方 井村てい
神奈川縣橫濱市海岸通五丁目二〇	内海健郎 同	鳥見町	淺野きぬえ	尼ヶ崎市大物町圓平寺
同	伊藤誠一郎 同	同	淺野しげ子	兵庫縣武庫郡今津町浦風
同 三浦郡久里濱村八幡	長島 きり 同	室町	馬淵 章	東京巢鴨大正大學内
同 靜岡縣清水市清水	中村 辨康 同	岐阜縣安八郡神戶町	若園 清作	新瀉縣柏崎町本町四
同 靜岡市札ノ辻町九	關 善平 同	同	若園 みれ	計五拾八名
同	關 秀子 同	揖斐郡河合村加納	栗野 準一	(順序不同)
同 同 住吉町十一番地	藤井 貞邦 同	同 揖斐町長源寺	松坂 ふい	
同 志太郡焼津町	天野 さく 同	土岐郡駄知町	籠橋休兵衛	
同 沼津市淺間町	辻 義 同	大坂市天王寺區上本町六ノ一	米田 傳司	
同	辻 つや 同	參宮急行電鐵會社		
同	全 眞之丞 同	同		
同	全 つゆ 同	大阪電氣軌道會社	橋本 政一	
同	大橋清三郎 同	此花區西島町北湊住宅	野田 三郎	
同	月谷 幸吉 同	南區鰻谷西之町八	奥村善次郎	
同	葛谷 繁雄 同	西區南堀江上通三丁目	藤田 楠雄	
同	引間 眞悟 同	天王寺區大道二丁目	樽本 幸子	
同 駿東郡御殿場町仁杉大乘寺	神谷辨秀 同	大阪府豐能郡麻田村麻田	曾我尾昌治	
同 名古屋市西區千歲町崇德寺	淺野 孝服 同	螢ヶ池	日暮興治右工門	
同 西區南外堀町一〇	中川五十子 同	南河内郡志紀村老原	藤谷 清一	
同 中區御器所町島喰一九	伊藤 留吉 同	堺市南旗籠町東三丁	松浦卯之助	
同 愛知縣海部郡佐屋村	黒宮 平八 同	神戸市生田町三ノ三五	秋葉鑑次郎	
大垣市郭町竹橋	桑原 省三 同	山本通四丁目八ノ四	藤村 興福	

(大正十四年八月十三日) 昭和二年十一月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第六卷 第十號
 (第三種郵便物認可) 昭和二年十一月十二日發行

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
 振替口座東京四七二八八番 眞生社
 東京市芝區芝公園第十四號地九番
 編輯兼 土屋 觀道
 發行人
 印刷人 佐藤 忠義
 發行所 眞生社